

どうか僕のエゴを知らないで

原山 海 (はらやま うみ)

僕は欲しいものに対して、誰よりも貪欲で狡猾だ
そんな自分を誰にも知ってほしくないのに、気づいてほしくないのに
それでもそんな心根をまるごと包み込んでほしい

「海は本当にいいやつだよな。」

「海は本当に偉いね。」

本当ならそれは喜ぶべき讃美言葉なのかもしれない。

でも、僕はそう言われるのは好きじゃない。誰かのために何かをしたいというよりももっと利己的な考えで動いているだけなのに、都合よく解釈されるとなんだか自分を否定されている気分になる。

誰かと比較されて、僕が問題を起こさなかったり、人に対してもいいやつであることだけが僕の存在意義のような気がして息苦しくなる。人のそういう機微に対して敏感になってそれに外れないように動かないといけなくなる。

褒めているようにみえて、僕をそういう人間であると形づけて縛り付けているだけ。

「いい人だというのはそうやって言った相手にとっていい人だという意味で、相手にとっての都合のいい人のことを指しているにすぎない。」

テレビの中のメガネのおじさんがそんなことを言っていた。

僕はそのおじさんことを知らなかったけど、その言葉は僕の心の中に残り、それまでいい子でいないといけないとと思っていた幼い僕の価値観にひびを入れた。

それでも誰かに嫌われるのが怖くて、いい子でいるのはやめられなかった。

学校では委員長をして、先生のお手伝いもするし、クラスで困っている子がいたら助ける。僕の立ち位置はそこにあって、いきなり変えることなんてできなかった。

そんな僕にとっての転機は小学4年生の時、山瀬浩樹が引っ越してきたことだった。

かっこいい男の子。初めの印象はそれだけだった。クラスの中でも背が高くて、顔もかっこいいし、自己紹介のときも媚びた笑顔を向けるわけでもなくサラっと終わらせた。

当然のように先生に頼まれて僕が浩樹を連れて学校の中を案内することになった。慣れた学校の中で何を案内していいのか分からないけど、一通り校内を連れて歩く。

無口そうだと思っていた僕の印象とは違い、浩樹は普通だった。話しかければ返してくれるし、話も盛り上がる。周りの目を気にしてばかりいる自分にはないかっこよさを感じた。

案内していると話しかけてくる友達にも浩樹のことを紹介しながら歩けば、みんなも転校生が来るなんて珍しい行事ということもあり、興味津々で近寄ってきた。

ただ、浩樹は女子が苦手なようだった。楽しく話しているところに女子が近寄ってくると少しだけ嫌な顔をした。他の人だったら気が付かないことなのかもしれないけど、気が付いてしまったのなら仕方がない。

僕は浩樹と仲良くなつて、仲の良い男子と一緒に囲つて女子から遠ざけることにした。

思い違いだったのかもしれないけど、出会つて初日なのに好感度が高かつた浩樹が少しでもこの学校で快適に過ごしてほしいと思ったからそうしただけだ。

浩樹自身も自分から女子に話しかけに行くこともなかつたから、きっと僕の推察は間違つてなかつたのだろう。

そうやって小学校時代を過ごした。中学校は浩樹と学区が違つていたため離れてしまつたけど、それでも楽しく過ごした思い出は心に刻まれた。

中学に入つてからも浩樹の動向はあまり知らない。勉強やら趣味のこと忙しくなつてしまい、連絡先も知らなかつたので少しずつ疎遠になつてしまつた

この頃、僕は弾き語りにはまつていた。お父さんからギターを貰つたことをきっかけに、毎日のように練習し、もともと歌うことも好きだつたため、高校生になつたら動画配信サイトに動画をあげていいという約束のために、毎日のように練習をしていた。

いろんな曲を練習する中で、お気に入りだつたバンドは『BLACK LIGHT(ブラックライト)』。ドラムが上手いで有名なグループだつたけど、僕は曲の雰囲気が好きだつた。

ちゃんと勉強も頑張つてそれなりの高校へと進学した僕は、入学式の次の日、校内で迷子になつてしまつた。どこだか分からなまま歩いているとドラムをたたく音が聞こえてきた。

遠くからきいてもかなり上手なそのリズムに、引き寄せられるように歩いていけば一番奥の教室にたどり着いた。第二音楽室と書かれたその教室の窓から覗くと、1人の女子がドラムをたたいていた。ヘッドホンをつけて一心不乱にリズムを刻んでいる彼女は生糸のドラマーに見えた。

1曲叩き終えた彼女はふと目を開けたので目が合つてしまつた。なんとなく気まずくてそのまま去ろうとしたが彼女はおもむろに立ち上がって僕の方へとやってくる。

「ドラム好きなの？学校にドラムセットあるの珍しいよね。数年前まであった軽音部のなごりらしいよ。」

名乗りもせずおもむろにそう話し始めた彼女はスティックを僕に差し出した。

「いや、僕は叩けないからいいよ。それよりも、軽音部？」

「うん。バンド活動をする部活。2年前になくなっちゃつたらしいけどね。ドラムをただで学校で叩けるのっていいよね。君は何か弾けないの？」

「僕は、ギターを少し弾けるかも。君みたいに特別うまいわけじゃないけど。歌うのも好き。僕は1年生の原山海。君は？」

「中谷夢（なかたに ゆめ）。私も1年生だし、何なら同じクラスだよ。ほら、これギター。セッションしよ。」

結局その後、何曲か彼女と一緒に曲を演奏してみた。誰かと一緒に演奏するのは楽しくて、軽音部を復活させようという話になり、部活を作るのに必要な5人を集めることになった。

中谷がベースを弾ける同じクラスの浜田清太（はまだきよた）とキーボードを弾ける隣のクラスの石山あやか（いしやま）を連れてきた。

あと一人が見つからない。そう思っていた時に思いもよらない人物を見つけた。石山に入部のことと用事があって向かうと、浩樹がちょうど反対側のドアから教室を出ていくのが見えた。

僕は追いかけていくと、何とか下駄箱の所で追いついて、その肩に手をかけて呼び止めた。驚いた顔をして振り向いた浩樹に僕は捲し立てるように声かける。

「浩樹だよな？僕、海！！原山海。覚えてる…よね？さすがに。」

背も伸びていて、あの頃よりもさらにかっこよくなっている。浩樹はしばらく僕の顔を見ていたかと思うと口を開いた。

「ひさしぶり。」

よかった。覚えていてくれた。それだけで十分で、僕はそのまま何も言わずに浩樹の腕を掴んで階段を上って渡り廊下を通って一番奥の第二音楽室と書かれた教室へと連れて行く。誰もいない教室の真ん中で浩樹は口を開いた。

「浩樹、一緒にバンドやろう。軽音部作りたいんだ。」

「えっと、状況があんまり飲み込めてないんだけど、俺楽器も弾けないし、歌もうまくないぞ。」

「浩樹に再会できたことがあまりにも嬉しくて説明忘れてた。今、軽音部を作ろうとしていて、浩樹とも一緒にできたら楽しそうだなと思ったら身体が先に動いちゃった。楽器は練習すればうまくなれるし、声もいい声なんだから歌も上手くなる可能性あると思う。だめかな？」

浩樹はそれ以上何も言わずに入部してくれることになった。いつもだったら相手の出方を伺いながら話すのに、一方的に誘ってしまう気持ちを抑えきれないほど浩樹のことを好きだったんだと思った。本当は嫌だったけど断れなかっただんじゃないかとかも思ったけど、浩樹は何も文句を言わなかったし、部室のギターを持って帰って練習をしてくれていた。

弾き方を教えてみたけど、僕自身も独学で覚えたこともあってあんまりうまく教えられない。少しずつ本当は嫌だったんじゃないかと不安に思い始め、一度2人で話そうと思い浩樹の家に遊びに行くことになった。

昔と何も変わらない家。先に部屋に行ってと言われてはいるが、机の上に一枚の楽譜が置かれていることに気が付いた。楽譜を読んでみたけど、思い当たるような曲がない。練習用にみつけてきたにしては難しすぎる。後ろからガチャリと音がして入ってきた浩樹に聞いてみた。

「浩樹、これなに？」

「曲だよ。」

「いや、何の曲だよ。練習してたのか？でも、こんな難しい曲初心者には早くないか？」

明らかに動搖した様子の浩樹を横目に楽譜を見ながらメロディを口ずさむ。すると、浩樹は僕の口をふさいで、いきなりのことバランスを崩してそのまま浩樹にベッドの上に押し倒されるような形になった。

「やめろ、歌うな。さすがに作った曲をその場で歌われるのは恥ずかしい。」

そう言った浩樹の顔は僕のことを見下ろしていて、妙な色気を感じた。そんなつもりではないのだろうし、偶然の産物でこうなっていることは分かっているけれど、元々浩樹の顔が整っているのもあるけど、なんだか変な気分になる。

脈打つ心臓の速さを感じて、顔が高揚していくのが分かる。見ないで、僕のそんな顔に気づかないで。頭の中が真っ白になっていく感覚に、うろたえる。浩樹はそんな僕の様子に気が付いているのか分からないけど、一言謝って僕の上から降りた。

「いや、えっと……。あ、そうだよ。作った曲って、これ浩樹が作ったのか？」

「ま、まあ。」

邪念を振り払うように楽譜を眺める。浩樹の顔は恥ずかしくて見られない。ただ、改めて楽譜を見てみればまるで初心者が適当に作った曲には見えない。

「これさ、すごくない？浩樹が本当に作ったのなら、天才だぞ。」

「これ、聞くか？別に誰でも作れると思うけど、ソフトさえ入れれば、勝手に弾いてくれるし。」

正直聞きたい。想像はできるけど、音が乗るとどうなるのか直接耳で感じたい。「聞く。」と言ってヘッドホンに耳を押し当てる。一瞬で好きだと思った。僕は何度もその曲をリピートして身体に刻み込み、ヘッドホンを外す。

「浩樹、この曲を僕は演奏したいし歌いたい。だめか？それに、これは今日聞こうかと思ってきたんだけど、浩樹は曲を演奏するのあまり好きじゃないだろ？」

「まあ、正直…。ギターの練習するよりも曲作る方が性に合っている気がする。でも、せっかく軽音部入ったのに、演奏できないままだと存在価値ないし。」

「じゃあさ、ギターは僕が歌いながらやるから作曲するのはどう？恥ずかしいのは分かるけど、それでもせっかく作ったのに聞いてほしいってならないのか？」

「考えたこともなかったけど、でも、変じゃない？俺の曲。」

「どこが変なんだよ。特にこのドラムの刻み方とかBLACK LIGHT(ブラックライト)ってバンドの雰囲気を感じるし、それでいてパクリでもないし、才能あると思うけど。」

結局、僕がギターとボーカルを兼任することになった。あの時の言葉は決してお世辞でも何でもなくて、素直に浩樹の作った曲が好きだった。他の部員も浩樹の曲を聞いて驚いていた。音楽をやっている人が聞いたら分かる。浩樹は作曲の天才かもしれない。

それから、素直にギターがあまり好きじゃないことを教えてくれたのもよかった。そのまま押し付けていたらお互によくなかったと思う。

浩樹が作曲して、キーボードの石山が作詞をかじったことがあると言っていたので作詞を行うことになり、夏休みが始まるまでには何曲かオリジナル曲ができていた。

そして、1つ気が付いたことがある。浩樹はきっとドラムが好きなんだと思う。そう思えるほどドラムの聞かせ方の構成を組むのが上手かった。しかも、ドラムの難易度がめちゃくちゃ高い曲ばかり作っている。中谷が上手いから叩けているものの、少しかじっただけの人では叩けないレベルだ。

そして、あの日以来僕の中で変わってしまったことがある。浩樹に対しての想いだ。浩樹のことを一番知っているのは自分で、浩樹の表情の引き出し方は一番僕が知っている。あまつさえ、あの時押し倒されたことを思い出してドキドキしている自分がいた。

正直、自分が男性を好きになるとは思っていなかったけど、この気持ちは恐らくそうなのだと思う。浩樹のことが好きで、自分のものにしたい。浩樹は女子があんまり好きじゃないけど、それでも性的趣向が男性に向いているとは限らない。

そんな気持ちの処理の仕方は分からなくて困っているタイミングで、ベースの清太に恋愛相談に乗ってほしいと言われた。どうやら、キーボードの石山が好きらしいが、石山の気持ちが分からないということだった。

他の男子と話しているともやもやするだったりとか、話に行くたびに緊張してうまく話せないだったり、いろんな表情を見てみたいけど怒らせるのが怖いだったり、清太の話をひたすら聞かされる。正直理解できることが多く、それで自分の気持ちを理解できた部分もある。

清太に好きな人はいないのかと聞かれたが、僕は相手まではあかさないものの好きな人がいることは伝えた。もちろん、石山ではないだけ伝えた。もし僕が浩樹のことを好きだと知ったら、清太は何を思うのか分からぬ。

それ以来、何かあるたびに清太とは恋愛相談をするようになった。

そして、事件は起こった。

夏休みのある日、部室に行くと1冊の本がバラバラに破かれていた。中身を全部読んだわけじゃないから分からぬけど、もし読み間違いではないのなら、僕と清太の恋愛模様を描いた漫画だった。どうして僕たちが描かれているのかも、誰がわざわざここに持ってきたのかも、そして破いたのかもわからない。

頭が真っ白になりそうになりながらも、部員が集まったところでみんなで話し合うことになった

他キャラクターのイメージ

【浜田清太】

基本的にはおとなしくて、気が強くないタイプ。

最近、石山のことが好きらしくどうしたら彼女とうまくいくかの相談をされていて、話を聞いている。自分にも好きな人がいることは伝えているが、それが浩樹とは伝えていない。

【中谷夢】

生粋のドラマー。ひたすら練習をしており、ドラムの腕前も相当なものだ。一つのことに集中すると納得するまで終わらない。浩樹の作った曲はドラムの難易度が高いものばかりだが、最初は苦戦することがあっても、いつの間にか叩けるようになっている。

【石山あやか】

のほほんとしており、雰囲気は浜田に会っているとは思う。でも浩樹と同じクラスであり、作詞と作曲をしていることから最近一緒にいる姿をよく見る。もしかしたらいい関係なのかもしれないと疑っている。

【山瀬浩樹】

中学では離れてしまったが幼馴染。正直、好きなんだと思う。なんかいい匂いするし、ごつごつした手を見るとドキドキする。最初は自分がおかしくなったんじゃないかと思っていたが、時間がたっても変わらないので認めつつある。

以前、ボトルシップに流した内容

【浩樹の家で楽譜を見つけて押し倒された後に投稿した内容】

あの距離はずるいよ…。どうやったって意識してしまうようになってしまったじゃん。

きっと、相手は何も思っていないんだろうけどさ 明日からどんな顔して会えばいいんだよ…。

【清太と恋バナした後に不安になって投稿した内容】

高校生になったらみんな恋人とか作るよね。

でも自分の気持ちはきっと伝えられることはないんだろうな。受け入れられる気がしないよ。

【石山と浩樹が新しい曲を作ったときに書いた投稿の内容】

僕も作詞してみたい。

でもやったことないし、変だって思われたらへこみそうでみんなには言えない。

才能が欲しいと思う。

目標

- ・BL本を書いた犯人と破いた犯人を探す。(普通にだれが書いたのか気になる)
- ・浩樹の気持ちを確かめる。(この際確かめてみるのも悪くない)
- ・誤解を解く(今のままではだれも幸せにならない。ただ、最初は犯人を探すために泳がせてもいいかも)

議論の最初にすること

前半議論が始まったタイミングで浜田清太を密談に誘って、何が起きているのか確認を行う。
誰かに止められたとしても必ず行う。

ボトルシップのID

rassy

ひいてはいけないボトルシップの番号

4・12・17